

# イノシシ被害を減らすためのカンキツ園周辺のエサ対策

農林水産総合技術センター 果樹試験場 環境部 法眼 利幸

## 1. はじめに

和歌山県ではイノシシ被害に対し防護柵設置や捕獲を中心とした対策が実施されているが、被害額が減少していく兆候はみられない。これは全国的に共通する問題で、イノシシの栄養状態が向上し増殖率が上がっているためではないかといわれている。ここでは被害の大きいカンキツ類の対策に繋げるため、カンキツ園周辺の増殖要因とその基本対策を明らかにする。

## 2. 材料と方法

果樹試験場周辺の踏査によりイノシシの痕跡から調査範囲を絞り込み、カンキツ園地周縁部にあるカンキツ果実廃棄場所と放置竹林で赤外線センサーカメラ（Moultrie Feeder 社製「Game Spy I40 と I45」）（以下カメラ）を用いた撮影調査を実施した。カメラはセンサーで動物を感知している間、1 分間隔で動画（明間 30 秒間、暗間 5 秒）と静止画を撮影し続けるよう設定し、撮影された映像による行動解析を実施した。また、行動調査の結果、増殖源と推定されたエサについて対策試験を実施した。

### 1) カンキツ果実廃棄場所の利用状況とエサ対策

平成 21 年 3～9 月に利用状況を調査し、平成 22～23 年に同場所にワイヤーメッシュで高さ 1m の囲いを作りイノシシの行動を調査した。

### 2) 放置竹林の利用状況とエサ対策

平成 22 年 3 月～23 年 9 月に利用状況を調査した。また、同様にイノシシの痕跡が多い隣の放置竹林において平成 21 年 7 月 2 日に除草剤（グリホサートカリウム塩液剤）注入による枯殺処理を行い、平成 22 年 5 月 27～28 日にイノシシの掘り起こした穴数をカウントした。

## 3. 結果と考察

### 1) カンキツ果実廃棄場所の利用状況とエサ対策

イノシシの出没は、撮影された獣類のべ 1,328 頭のうちイノシシが 95%を占め、果実の廃棄のみられた 3～6 月に多く、廃棄のない 7 月以降に減少した（図 1、2）。カンキツ類果実を廃棄するとイノシシのエサとなるケースが多いと考えられ、また 5 月以降は幼獣の出没も増えるなど、廃棄果実はイノシシが出産期（通常 4～5 月）前後に利用できる重要なエサになっていると考えられた（図 5）。

廃棄場所に囲いを設置したところ、イノシシは囲いからはみ出た果実を食べていたが、囲い内部への侵入は全くみられなかった。山林等で農作物残渣は廃棄しないことを徹底し、やむを得ない場合は防護柵のある園地内でさらに囲いを作り堆積することが望ましい。

### 2) 放置竹林の利用状況とエサ対策

イノシシ出沒数（撮影数）は 4～6 月に多くなり（図 3）、掘り起こしも同時に増えたが、7

月以降は激減した。本地域においては放置竹林のタケノコが、廃棄果実と同様にイノシシの出産期前後の重要かつ安定的なエサになっていると考えられた。なお、島根県では竹林の掘り起こしが晩秋～春にかけて多くなる（小寺 2001）とされ、エサ環境の異なる地域では竹林の利用時期が変わることがある。

除草剤の注入により竹稈は 2010 年 5 月に全て枯死し、新たなタケノコが発生は認められなかった。イノシシによる掘り起こし箇所数は枯殺処理区が無処理区より有意に少なく（図 4）、竹林を除去することでイノシシのエサを減らすことができると考えられた。

#### 4. おわりに

カンキツ生産地域ではイノシシの増殖に繋がるエサは廃棄果実とタケノコであることを明らかにしたが、現場がこれらの対策に取り組んではじめて有効なものとなる。さらに農家や住民の「自分たちで取り組むもの」という意識づくりも課題である。先進県では、獣害対策は「地域づくり」「人づくり」が重要だとして住民主体のソフト事業に重点がおかれている。



図 1 廃棄果実に群がるイノシシ

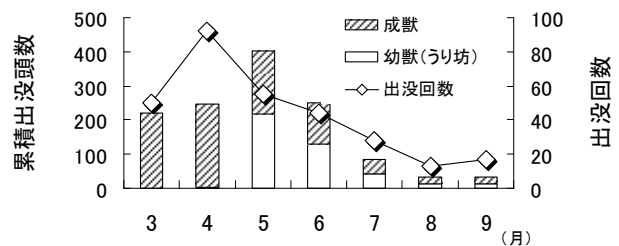


図 2 カンキツ果実廃棄場所におけるイノシシ出沒数と回数の推移

※ 廃棄は 6 月まで確認された

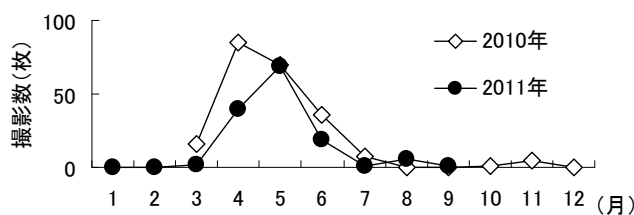


図 3 竹林におけるイノシシ出沒数の推移

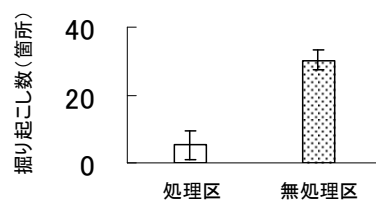


図 4 竹林における処理区別のイノシシ掘り起こし数

※ 処理区間に有意差あり (t-test  $P < 0.01$ )

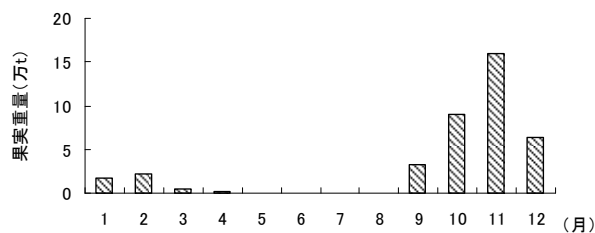


図 5 果試周辺地域における獣類可食カンキツ類果実量の推移

※ JA ありだ選果場 平成 22 年度カンキツ類果実取り扱い量から推計